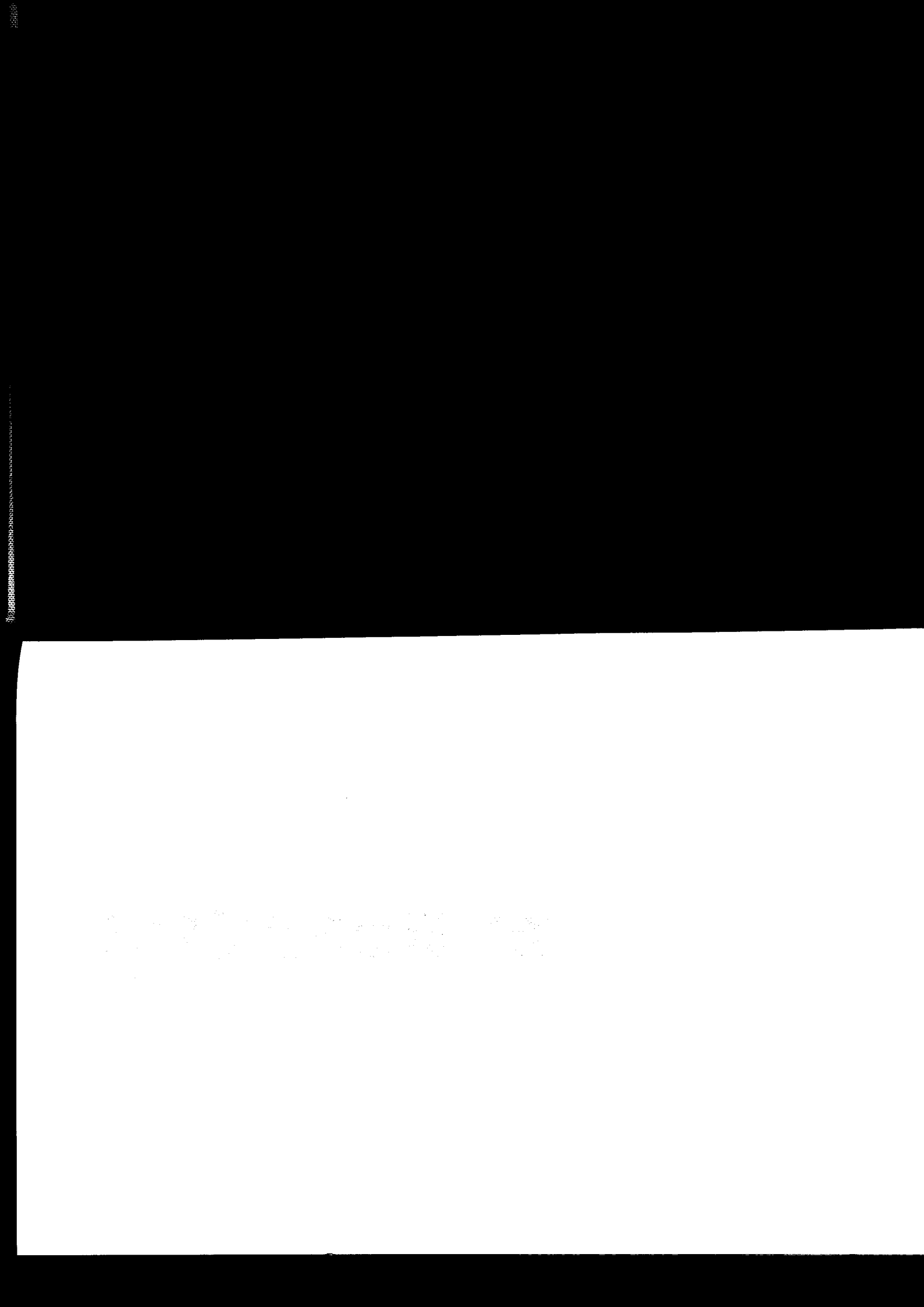


片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

鈴木隆司（すずき・たかし）
1970年生まれ。京都大学大学院博士後期課程修了。高知大学准教授。主要論文「在中将集の性質と成立（上）（下）」（『国語国文』67-2,3）「伊勢物語享受の一側面－新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌－」（『国語国文』70-7）

日下幸男（くさか・ゆきお）
1949年生まれ。大阪府立大学大学院博士後期課程修了。龍谷大学教授。主要著書『細川幽斎聞書』（和泉書院）『近世古今伝授史の研究地下篇』（新典社）『歌論歌学集成』第14巻（共著・三弥井書店）『中世近世和歌文芸論集』（編著・思文閣出版）

大口裕子（おおぐち・ひろこ）
1976年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。霞会館資料展示委員会学芸員。主要論文「伊勢物語絵百十九段と能〈松風〉－「形見こそ」の和歌を中心に－」（『美術史』160号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第三巻

2008年（平成20）9月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒101 0064　東京都千代田区猿楽町 2-2-3
☎ 03-3295 1331㈹　FAX03-3294 0996
NDC分類 913.32　振替00110 1-56002

ISBN4-305-70043 8 C3395　藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。　（本文用紙：中性紙使用）
http://www.kasamashoin.co.jp

伊勢物語肖聞抄

延徳三年本

（聖護院蔵）

日下幸男

れん
此返しは、前の歌に我を思心見えたれは、その心さしをいつわすれんと云也。

十一

一　むかし男　友たち、たれともなし。
わするなよ程は雲井に成ぬとも空行月のめくりあふまて
この歌、『拾遺』には橘のたゝもとか歌と見えたり。かやうの事は此物語におほし。此物語にては、業平のと心得へし。程は雲井とは遠さかるともと云儀也。めくりあふまてとは、我たちかへりてあふまてわするなと云儀也。月によそへていへり。

十二

一　むかし人のむすめを　誰ともなし。
むさし野へゐてゆく　此段のさま、ことに作物語と見えたり。人をぬすみてといへるに付て、からめられにけりとも、又火つけんとすともかけるなるへし。此物語の誹諧也。

十

一　むかし男むさしの国　此国にある女、誰ともなし。
ちゝはこと人に　女の父の心には、業平にあはせん事、過分に思て、こと人にといへる也。なを人とは大方種姓たうとからぬ家の人なるへし。一禅御説、同之。
はゝなむ藤原　四姓の中にも藤氏は賞翫なれは、かくいへり。家のたかく思ひあかりたる人は、斟酌の心もなく、風流なる人にあはせんと思なるへし。
あてなる人　勝人となり。ほめたる儀也。
むこかね　むこの器量也。『源氏物語』にも、きさきになるへき人を后かねと云、同之。
よみて　よむてとよむ也。これよみくせ也。
みよし野のたのむのかりもひたふるに君か方にそよると鳴なる
心は、業平をむこにとらむとおもふ心ふかきゆへに、所みよしのにて鴈おほき所なれは、かりも君か方によると鳴そとよめり。たゝ我心をかりにいはする也。
我方によると鳴なるみよしの野のたのむの鴈をいつかわすみちくる人　満来也。
武蔵野はけふはなやきそ若草の妻もこもれり我もこもれり
此段の詞、かゝる歌あれは、つくり事にかける也。歌の心はあらは也。つまは我妻也。
女をはとりてともに　国のかみ女をくして行也。

十三

一　むかしむさしなる男　業平と也。
京なる女　誰ともなし。『古註』、四条后と云々。四条后といふ事、不用之。其上、清和の御時立后の事なし。
きこゆれははつかし　恋路のわりなきならひ也。
むさしあふみと書て　かけて思といふ心也。むさしあふみと云事は、むかしはその国よりたてまつり始たる物をは、如此号する事あり。一禅御説同。信濃のま弓といふも、その国の御調の所也。
むさしあふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし
かけてたのむといはん枕詞也。とはぬもつらしとふもうるさしとは、思ふ中のさすか忍ふ事あるゆへ也。誠に恋路のわりなきさま也。
たへかたき心ちす　女の歌の心、とにかくにたへかたくくるしきと也。
とへはいふとはねはうらむ武蔵鐙かゝるおりにや人はしぬらん
心は思ひの一方になけれは、いかさまにせんとおもふにも猶たへわひぬ。かやうの事のあるおりにや、人のしぬるといふこともあるらんと云儀也。

十四

一　むかし男みちの国にすゝろに　すゝろとは心ならすの儀也。
そこなる女　誰ともなし。
中々に恋にしなすはくわこにそなるへかりける玉のをはかり
心は恋といふ物は、あひみる事をたのむに、さも侍らねはせめてしなんとも思ふに、それも又かなはぬ心也。されは中々に恋にしなてあらは、せめて桑子にもならはやと云儀也。桑子はちきりふかき物なり。又命一年を過さ

る物なれは、とり合てかくねかふ也。此歌『万葉』にあり。是又作事也。玉のをはかりとは、しはしのね(時)もといふ心也。

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

きつとは狐也。下略也。くたかけは家の鶏といふ心也。但庭鳥と心うる、至極也。心は夜ふかく鳴て、思人をかへせは狐にくはせんといへる也。此段みな作物語也。

くりはらのあねはの松の人ならは都のつとにいさといはましを

これも、

をくろさきみつの小島の人ならは

といふ歌をいひかへてつくりたる也。こゝろはあねはの松をその人にたとへて、さそはるへき人ならは、いさといはまし物をと云儀也。又予今案あり。しかはあれといひいてん事は憚ありて、さしをき侍ぬ。

よろこほひて　東国の詞のさま也。

おもひけらしとそ　男の思ひけるよと女のいひて、よろこひたる文なり。

十五

一　むかし男なてう事なき人　なにはかりの人にもあらすと云心也。『枕草子』『源氏物語』にも「させる人にあらさる人」と見ゆ。

あやしうさやうにて　人のめなれはかく思へり。

忍山しのひてかよふ道もかな人の心のおくもみるへく

忍ひてかよふ道もかなとは、人の胸中に忍ひてかよふ道もかなと云心也。尤めつらしうして、しかも詞やさしき歌也。これらは誠業平の歌なるへし。おほく古歌をわさとつくりて、業平とかけるおほかるへし。

さるさかなき　悪也。不祥也。

えひすこゝろ　たはむかたなく、すくなるやうの心也。さやうの心にてをし（たる）ふるまひなとありては、いかゝせんと思へる也。せんはの「は」ゝ文字をそへたるはかりなり。

十六

一　むかし紀有常　業平のしうと也。又朋友也。

三代の御門　淳和、仁明、文徳。

世かはり　清和の御時事也。有常は惟高方によれる人也。惟高は名虎か女静子の腹にておはす。有常は名虎か子也。

よのつねの（人の）事もあらす　如也。おとろへたる体也。

あてはかなる事を　風流なる事也。有常か性をほめたる也。

こと人にも似す　世のつねの人は貧てはへつらひ、富てはおこる也。有常はさもあらすと也。

よのつねの事もしらす　世務をもしらすと也。

とこはなれ　ふうふ中をはなるゝ心也。常の字也。又は床也。いつれも離別の心也。

あねのさきたちてなりたる　（有常か妻のあね也。

おとこまことにむつましき事こそ）　有常か妻の性おもはしからす。かゝる時節を堪忍せすしてはなるゝをも以しりぬ。平生も有常か心に誠むつましと思はすも有ぬへし。され共わかるゝはあはれなるへし。

友たち　業平事也。おもひわひてとかける詞、心あるへし。思あまりて業平のかたへもいへる也。

手を折てあひみし事をかそふれはとをといひつゝ四はへにけり

心はたゝ有常、我妻四十年の契なる涙(袖)也。女の心なき事、此歌のうちにこもる也。

よるのものまて　種々の物を送ると見えたり。

年たにも十とて四はへにけるをいくたひ君をたのみきぬらん

心は、年さへよそちの契りならは、いかにそのうちに君をもたのみけんを、今たちわかるゝ（心）さこそと、妻の心をたすけていへるなるへし。

これやこのあまの羽衣むへしこそ君かみけしとたてまつりけれ

業平色々の衣なとつかはしたるを、哀にしかもうれしさのあまりにかくいへり。心は、是やあまの羽衣ならんと、まつ大やうにほめて、ことはり也けり、君かきたる衣なれはと、自問自答したる也。みけしは上衣也。又御衣なり。

よろこひにたへて又　一首にてなを不足なるによて也。